

天川二子山古墳

周堀範囲確認調査報告書

2003

前橋市教育委員会

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代より豊かな文化があふれる地であり、東日本でも際だった内容を示しています。今から約2万8千年前の旧石器をはじめとして、11遺跡を数える国指定史跡、関東の華とうたわれた前橋城に関するもの等多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内ほぼ全域にわたり残されています。古代の人々が暮らした家の跡や使用した石器や土器などの道具、水田跡なども多く、周辺の埋蔵文化財発掘調査によって多くの新しい知見が集積されています。

天川二子山古墳は、前橋市街地南東の文京町から朝倉町にかけて大小の古墳が集中的に存在する「朝倉古墳群」に属し、その中でも代表的な古墳の一つです。過去に行われた発掘調査で周堀の痕跡も見つかっています。

今回は古墳北側で古墳周堀の有無とその範囲を確認する目的で調査を実施しました。限られた部分での調査のため、その全容を把握するまでには至りませんでしたが、古墳周堀の範囲を想定しうる貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたり、ご協力いただきました各関係機関の方々、地元関係者、調査に従事された皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成16年3月

前橋市教育委員会

教育長 桜井直紀

例　　言

1. 本報告書は、天川二子山古墳周囲範囲確認調査報告書である。
2. 調査の所在地 群馬県前橋市文京町三丁目地内（二子山地区土地区画整理区域内第70街区地内）
3. 調査事業主体は前橋市教育委員会である。
　調査担当者 小峰 篤（前橋市教育委員会 文化財保護課）
　大崎 和久（　　同　　上　　）
　整理担当者 小峰 篤　　大崎 和久
4. 発掘調査期間 平成15年6月23日～平成15年7月8日
　整理期間　　平成15年11月4日～平成16年1月30日

凡　　例

1. 採図中に使用した北は、座標北である。
2. 採図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（宇都宮）、1/2.5万地形図（前橋）を使用した。
3. 本遺跡の略称は、15H35である。
4. 実測図の縮尺は以下のとおりである。
　トレンチ設定図…1/600　　トレンチ土層断面図…1/60
　なお、トレンチ土層断面図は、すべて左側を古墳墳丘方向とした。
5. 本文中の基本土層及び各トレンチ土層断面図の注記には、「新版標準土色帖」1995年度版を使用した。粘性と締まりの記号については、以下のとおりである。
　粘性○・締まり○……あり
　粘性△・締まり△……ややあり
　粘性×・締まり×……なし
6. 本書の原稿執筆編集は、小峰・大崎が行った。なお、本文中で使用するテフラの名称については、以下のとおりである。

名 称	略 称	給 源 火 山	噴 出 年 代	特 徵 ・ 分 布
浅間Bテフラ	As-B	浅間山	AD.1108	関東全域に分布　灰色や黄灰色等の軽石や灰
榛名二ッ岳伊香保テフラ	Hr-FP	榛名山	6世紀中葉	尾瀬方向の東北地方に分布　発泡軽石中心
榛名二ッ岳渋川テフラ	Hr-FA	榛名山	6世紀初頭	関東地方一帯から東北南部に分布
浅間C軽石	As-C	浅間山	4世紀前半	発泡の良い黄褐色軽石　給源から東方向に分布

7. 調査にかかわった方々は次のとおりである。（順不同・敬称略）
　阿部シゲ子・神澤とし江・橋本 茂・井上和久・大澤敏子・原田要三・中山 昭

目 次

序	i
例 言	ii
凡 例	ii
I 章 調査経過と調査方法	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査方法と経過	1
II 章 調査地の立地と歴史的環境	2
1. 立地	2
2. 歴史的環境	2
III 章 基本層序	7
IV 章 各トレンチの概要	7
V 章 まとめ	10
1. 古墳周堀について	10
2. その他の遺構について	11

挿 図

Fig. 1 天川二子山古墳位置図

Fig. 2 周辺遺跡図

Fig. 3 天川二子山古墳周堀範囲確認調査トレンチ設定図

Fig. 4 1号（1a、1b）・2号トレンチ土層断面図

Fig. 5 3号～6号（6a）トレンチ土層断面図

Fig. 6 6号（6b）・7号・8号（8a、8b）トレンチ土層断面図

写 真 図 版

PL. 1 1号（1a、1b）・2号トレンチ

PL. 2 3号・4号・5号・6号（6a）トレンチ

PL. 3 6号（6b）・7号・8号（8a、8b）トレンチ

I 章 調査経過と調査方法

1. 調査に至る経緯

天川二子山古墳は、前橋市文京町にある大型の前方後円墳である。前橋市街地南東の文京町から朝倉町にかけて大小様々な古墳が集中する「朝倉古墳群」に属し、その北端に位置する全長104mの古墳時代後期を代表する古墳である。また、昭和2年6月14日に国指定史跡に指定されている。

天川二子山古墳の所在する前橋市文京町周辺では、現在前橋市が土地区画整理事業を実施している。前橋都市計画事業二子山土地区画整理事業がその正式名称である。当古墳を含む1ブロックは既に区画整理区域内第70街区として道路等の整備が進行している。また、この第70街区の事業計画の中には、古墳としての起伏した地形や特性を活用した立体的な近隣公園として整備することが盛り込まれている。(現在、古墳南側の広場は地元住民の憩いの場として活用されている。)

当古墳に関しては過去の周辺で行われた発掘調査等で、古墳を取り巻く周囲の存在が判明しているが、墳丘に近い場所では調査の手が入っていないかった。こうした事情から、今後公園整備に際して地下の遺構を傷つけるような事故が生じないよう事前に調査を実施し地下の状況を把握しておくことが非常に重要である。このことから、今回調査実施可能な古墳北側に限定して古墳周囲推定域の範囲確認調査を実施することになった。

2. 調査方法と経過

今回の調査は平成15年6月23日から平成15年7月8日の期間で行った。調査体制は、調査担当職員2名、発掘調査作業員7名の計9名である。調査方法は、地下の遺構を傷つけることを最小限に抑えるため、トレンチ調査とした。トレンチは、前方部前面に直交する方向で3本、古墳の軸線に対してほぼ直交する形で5本、計8本を設定した(トレンチ設定図を参照)。また、トレンチは西から東に向かって1、2、3・・・と付番した。

調査手順は、まず重機によりトレンチの掘削を行った。1、2、4、5、6、7、8、3号トレンチの順である。掘削後トレンチ底面と断面を精査し、調査担当者による土層断面の確認と写真撮影を行った。最後にトレンチ土層断面等の測量作業を実施した。

その際調査区内に打設したグリッド杭については、過去の周辺遺跡調査結果との関連性を把握する為、旧日本測地系に基づき実施している。Fig.3 天川二子山古墳周囲確認調査トレンチ設定図中の公共座標値は、旧日本測地系による数値である。調査実施時期は梅雨時期とも重なり、小雨の降る最中も調査を継続しなければならない状況もあったが、予定していた現地での調査全行程を平成15年7月8日をもって終了することができた。

II章 調査地の立地と歴史的環境

1. 立 地

前橋市は、地形や地質などの観点から、赤城火山斜面、洪積台地（前橋台地）、沖積低地（広瀬川低地帯）、現利根川氾濫原の4つに大きく区分される。天川二子山古墳が所在する前橋市文京町は、前橋台地の東縁に位置する。この地は群馬県からも直線距離にして約3キロと前橋市街地にも近い。古墳のすぐ南を東西に走る主要地方道前橋・館林線沿いには大型の飲食店や衣料品店など様々な店舗が軒を連ね賑わいを見せており、また周辺には公共施設も多く、市立天川小学校、市立第五中学校、県立生涯学習センターや県立文書館などの施設がある。学习の拠点ともいえるこの地に、天川二子山古墳があることは地域の歴史・文化を学ぶうえでの存在意義は大きい。古墳の墳頂部に立って南を見渡せば天川原町、朝倉町の閑静な住宅地を隔てて、一面水田が続く前橋市の田園地帯が広がり、古代における優れた環境が偲ばれる。

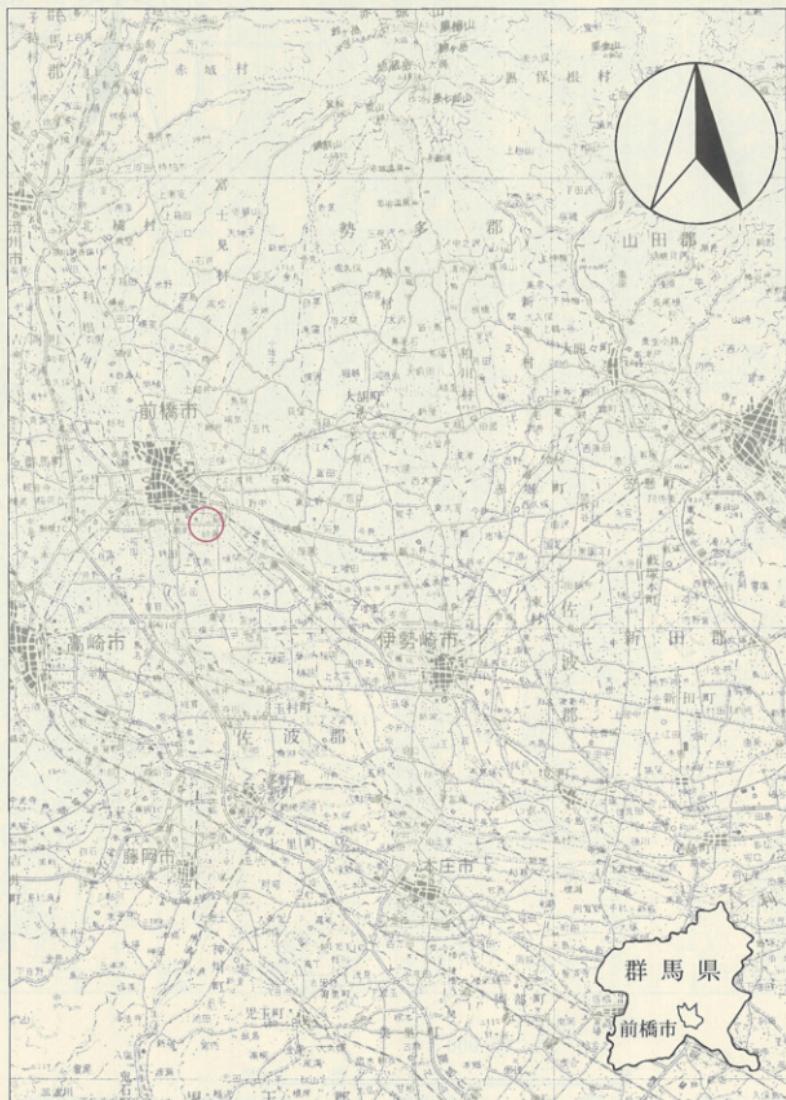
2. 歴史的環境

今回調査を実施した天川二子山古墳周辺の遺跡に目を向けてみる。当古墳が所在する前橋台地上には、前橋市さらには群馬県を代表する古墳が広がりをみせる。また、南下すれば集落跡や古代水田跡なども多く検出されている。ここでは、検出された遺構ごとに概観する。

まず古墳群であるが、前橋台地上の広瀬川右岸に沿う自然堤防に連なって、「朝倉古墳群」、「後閑古墳群」、「山王古墳群」が存在する。これらはマクロなエリアで捉え広瀬川古墳群と総称され一大古墳群の様相を呈している。昭和10年の県下一斎調査では、前橋市15基、旧上川瀬村113基、隣接する旧上湯村41基とこの地域で169基もの古墳が存在していた。しかし、その大半は昭和30年以降顯著となった宅地造成事業等により、未調査のまま削平されてしまった。現在は、八幡山古墳（国指定史跡、4世紀後半、前方後方墳、全長約130m）、天神山古墳（県指定史跡、4世紀後半、前方後円墳、全長約129m、現在は後円部中心部を残すのみ）、亀塚山古墳（市指定史跡、6世紀前半、帆立貝式古墳、推定全長約60m）、金冠塚古墳（市指定史跡、7世紀前半、前方後円墳、全長52.5m、宝珠型の金銅製の冠が出土）、経塚古墳（市指定史跡、7世紀、円墳、現状径25m）などに当時の古墳群の片鱗を窺うことができる。これらの古墳群が形成されていた背景には、有力豪族とそれを支えた人々の存在が想起される。当地域が古墳時代初期より継続して発展をしていたことは明らかである。

集落跡の遺跡を見ると、古墳時代前期（石田川期）の後閑団地遺跡、六供下堂木II遺跡、古墳時代後期（鬼高期）の後閑II遺跡、坊山遺跡、川曲遺跡、下新田遺跡などがあげられる。奈良・平安時代の遺構、住居跡や掘立柱建物跡などが後閑団地遺跡、後閑II遺跡で検出されている。

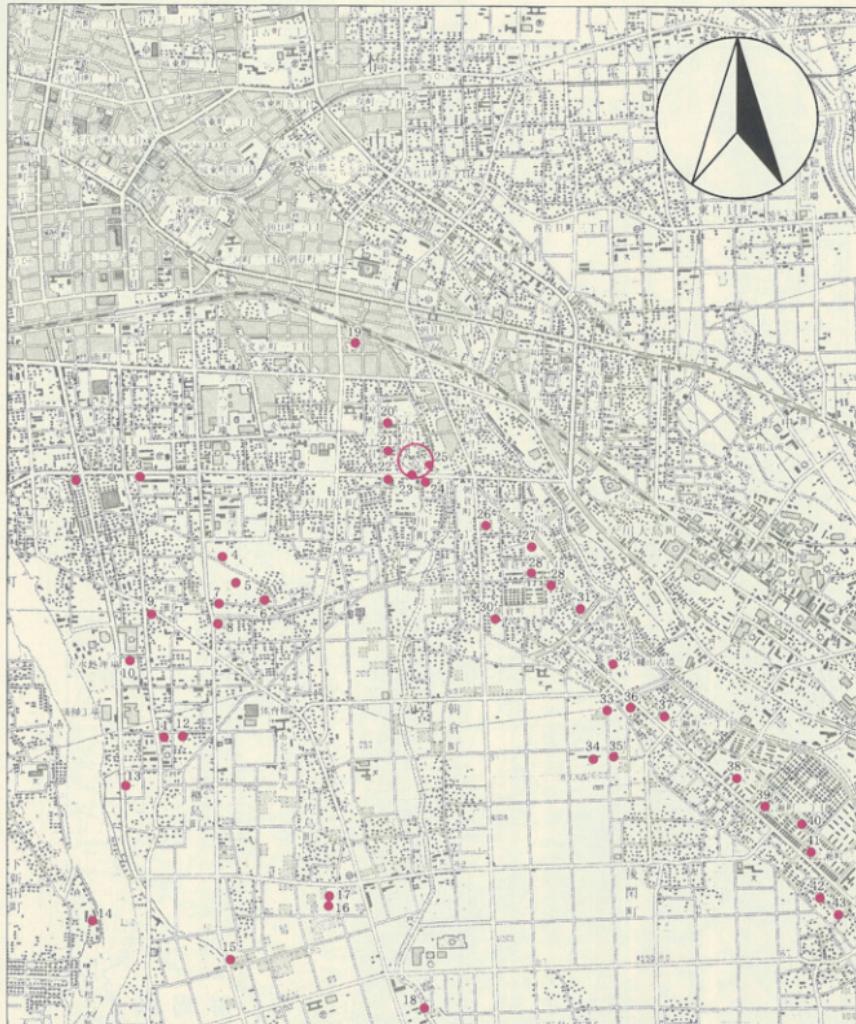
水田跡に至っては、Hr-FA（様名ニッ岳火山灰：6世紀初頭）に覆われた規模の小さい小区画水田が、公田池尻遺跡、公田東遺跡、六供下堂木II遺跡で検出された。また、As-B轆石（浅間山起源：1108年降下）に埋没した平安時代末期の水田跡（利根川両岸に跨って形成されていた条里制に起因する一定の規格性を持った水田跡）も近年の調査で数多く見つかっている。代表的な遺跡としては、中大門遺跡（六供町）、後閑II遺跡（後閑町）、宮地中田遺跡（宮地町）、六供下堂木II遺跡（六供町）、上佐鳥中原前遺跡（上佐鳥町）があげられる。これらのことから、条里制水田跡の中心とされてきた高崎市東部及び北部から利根川を越え前橋市南部にまで条里制による土地区画が及んでいたことを示している。



1 : 200,000

0 5 10 15 20 千メートル

Fig. 1 天川二子山古墳位置図



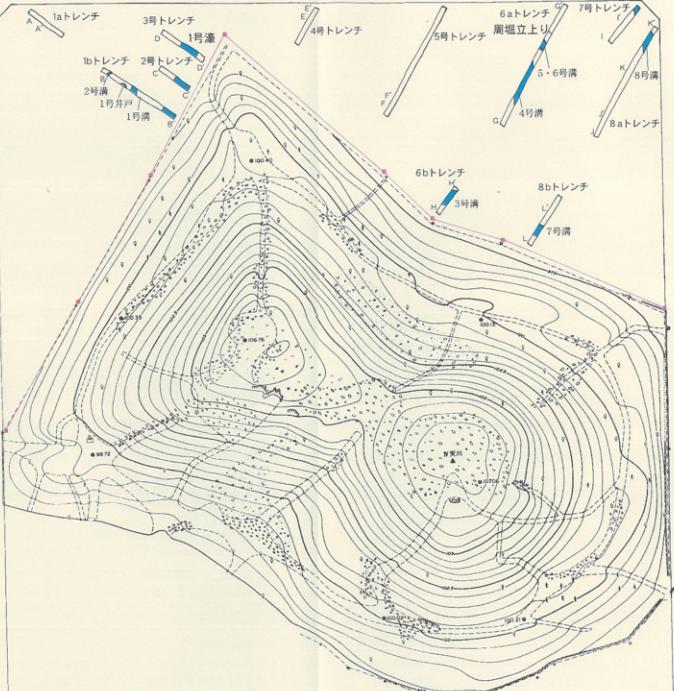
1 : 25,000

500m 0 500 1000 1500

1 天川二子山古墳	2 生川遺跡	3 西天神遺跡	4 六供下堂木IV遺跡	5 六供下堂木II遺跡
6 六供下堂木遺跡	7 六供下堂木田遺跡	8 六供東京安寺遺跡	9 六供中京安寺遺跡	10 中大門遺跡
11 南京安寺道路	12 東京安寺遺跡	13 横鳥川端遺跡	14 下新田遺跡	15 公田東遺跡
16 上佐鳥中原前遺跡	17 上佐鳥中原前II遺跡	18 下佐鳥遺跡	19 不二山古墳I・II	20 寄居遺跡
21 墓立文書館遺跡	22 二子山前遺跡	23 二子山前II遺跡	24 二子山前III遺跡	25 二子山前IV遺跡
26 小且那遺跡	27 朝倉2号古墳	28 長山遺跡	29 朝倉1号遺跡	30 鎮守密り遺跡
31 朝倉3号古墳	32 八幡山古墳	33 後園团地遺跡	34 後園遺跡	35 後園II遺跡
36 坊山遺跡	37 天神山古墳	38 駿玉神社古墳	39 大原敷古墳	40 行入郎古墳
41 鶴巣山古墳	42 上間家二子山古墳	43 包食塚古墳		

Fig. 2 周辺遺跡図

天川二子山古墳周囲範囲確認調査
トレンチ設定図



凡 例

- ・フェンス部分及び古墳周囲立ち上がり部は赤で示した。
- ・濠、溝等の造構部分は、青で示した。

0 1:600 50m

Fig. 3 天川二子山古墳周囲範囲確認調査トレンチ設定図

III章 基本層序

古墳周囲内で基盤層に堆積している土層は次のとおりである。調査地は以前、その大半に住宅が建っており、盛り土などがされている部分も多かった。全体的には、現地表面から約50cmが表土であった。特に古墳前方部全面に設定した1から3号トレンチでは、盛り土の影響か深いところで表土が1mに達する部分もある。

なお、基本層序となる土層断面は1aトレンチ内西壁で確認した。

【土層説明】

- 1層 擾乱層、表土。
- 2層 暗褐色砂質土層。炭化物、砂鉄分が多い流入土。As-B軽石が主体でHr-FP、As-C軽石が少量含まれる。
- 3層 暗褐色砂質土層。川砂やAs-B軽石主体の軽石を含む流入土。木炭粒、焼土粒あり。
- 4層 黒褐色砂質土層。As-B軽石が主体で川砂が多量に含まれる。この面がある時期表面に出ていたことがあり、その当時の遺構面（塙など）であったと思われる。
- 5層 灰褐色粘土層。すべてのトレンチにおいて基盤層直上に堆積する。鉄分が沈殿。As-C軽石粒を含む。5層上面が周掘振り方の上面となる。
- 6層 黑褐色土層。ローム層直上に自然堆積する安定した綿密な土層。漸移層。
- 7層 ローム層。基盤層。

IV章 各トレンチの概要

今回の調査では古墳周囲範囲の確認及び遺構面までの深度等基礎データの把握が主目的である。従って、トレンチの設定にあたっては両目的を達することができるよう慎重に行った(Fig.3 トレンチ設定図参照)。古墳前方部前面に対して直交するように3本、墳丘主軸に対し直交ように5本、計8本である。各トレンチの状況は次のとおりである。

前方部前面のトレンチ	墳丘北側のトレンチ
1号トレンチ	4号トレンチ
2号トレンチ	5号トレンチ
3号トレンチ	6号トレンチ
	7号トレンチ
	8号トレンチ

【1号トレンチ】

1号トレンチは古墳前方部前面に対して設定したトレンチの中で最も長いものである。重機の搬入・搬出路確保のため一部掘削できなかった為、1号トレンチは2本に分かれている。1aトレンチ、1bトレンチである(Fig.3 トレンチ設定図参照)。1aトレンチが6.6m、1bトレンチが13.8mで掘削部分では計20.4mである。調査地と史跡地の境に、現在鉄製網フェンスが設置してあるが、1bトレンチはそのフェンス際から掘削を開始している。そこから最も遠い1aトレンチ西端部で、28.9mを測る。

両トレンチ部分は、他の部分と比較して盛土が多くされており、表土は厚い。最も厚みのあるところでは96cmである。トレンチ深度は130~185cmである。

まず墳丘から離れた位置の 1 a トレンチであるが、壁断面を精査した結果基本層序に述べた 1 層から 5 層が特段の変化無く堆積していた。周囲基盤層直上の粘土層も約 12cm で均一に堆積している。したがって本トレンチは、古墳周囲内にあることは明確である。

次に 1 b トレンチであるが、表土は厚くフェンスから 2.5m 地点から 4.8m 地点にかけて現代の擾乱が見られた。深いところでは 120cm に及んでいた。基本的には 1 层から 3 層までがほぼ平坦に堆積している。4 層を掘り込む形で古墳周囲とは直結しない時期の遺構（濠、溝跡など）が現れる。墳丘に極めて近いところで、環濠の濠と思われる薬研堀（2 号トレンチ、3 号トレンチでも本遺構の続きが検出されている）、フェンスから約 7 m 地点と約 12.5m 地点で小規模な溝、また、9.5m 地点では井戸跡がそれぞれ検出された。薬研堀には、流れ込んだと思われる古墳の葺石が多く見受けられた。基盤層直上の粘土層は墳丘に近い部分では 10~18cm の厚さで堆積が見られるが、離れるに従い堆積がなくなる。基盤層はやや凹凸がみられた。

【2号トレンチ】

1 号トレンチ同様、フェンス際から掘削を開始し、全長は 7.2m を測る。墳丘前方部前面に設置したトレンチの中では最も現代の影響を受けている。深いところでは現地表面から 130cm 剥離しており、2 層は全く検出できず 3 層もトレンチ中央部から西端付近まで擾乱を受け確認できない。トレンチ東端から 1.3m から 4 m 地点までの幅で薬研堀が検出された。1 号トレンチで検出した遺構の続き部分である。基盤層及び直上の粘土層は 1 号トレンチと比較するとほぼ一定である。粘土層は平均すると 16cm の層厚であった。

フェンス直下の部分では基盤層の直上に粘土層は確認されず、漸移層が現れさらに明黄褐色土（古墳の盛り土が崩れたものか？）がわずかに認められた。

【3号トレンチ】

フェンス際から 7.7m を掘削した。掘り始めから 1.2m 地点まで大きく擾乱が入り基盤層にまで達していた。表土は 80~100cm の厚さで見られたが、直下には 2 層、3 層がほぼ平坦な堆積状況で確認できたことから、2 号トレンチほどは後世の擾乱を受けていない。トレンチ内では、1・2 号トレンチで検出された薬研堀の続き部分が東端から 1.2m 地点から 4.3m 地点までの幅で検出され、濠内には流れ込んだ石が数多く確認された。基盤層直上の堆積状況を見ると、フェンス際から約 1.5m 地点までは漸移層が見られる。それより先は濠により確かめるすべはない。その濠部分が立ち上がったところからは、他のトレンチ同様粘土層が堆積する。特に 3 号トレンチの粘土層は厚く堆積する。多いところで 30cm を越えていた。また、本トレンチで注目する点は、基盤層が墳丘側から外側に向かって傾斜していることである。差にして約 50cm であった。

【4号トレンチ】

4 号トレンチから 8 号トレンチは墳丘主軸に対しほぼ直交するよう設定した (Fig. 3 トレンチ設定図参照)。前方部から後円部に向かって付番した。なお、4 号及び 5 号トレンチは調査地内の事情によりフェンス際からの掘削ができなかった。

4 号トレンチはフェンスから約 6 m 離れた地点から掘削を開始した。延長は 6.8m を測る。トレンチの深さは 122 cm である。土層断面を精査した結果、1 a トレンチと同一であった。表土部分は 30cm 程と前述したトレンチより薄くなるが、表土下の状況は 2 層から 5 層までが平坦に堆積する。特に 5 層が約 23cm の厚さを保って平坦に確認できることから、本トレンチ部分は古墳周囲内に属することが明白である。基盤層に至っても殆ど平坦であった。

【5号トレンチ】

5 号トレンチはフェンスから約 7 m 離れた地点から掘削を開始し、延長は 19.2m に及ぶ。トレンチの深さは 92 cm を測る。土層の堆積は 4 号トレンチと同一で、表土が約 25cm でその下に 2 層から 5 層が水平に堆積する。5 層は約 15cm の厚さを持ち、基盤層も平坦である。したがって、本トレンチも古墳周囲内に属することがわかる。

【6号トレンチ】

今回の調査中最も長いものであり、古墳周囲の立ち上がりと思われる箇所が検出されたトレンチである。トレンチは、墳丘のくびれ部分から北東に向かって設定した(Fig. 3 トレンチ設定図参照)。本トレンチは1号トレンチ同様調査地内の事情により2本に分割した。古墳墳丘に近い方を6 bトレンチ、もう一方を6 aトレンチとした。

まず6 bトレンチであるが、フェンスから約1.3m離れた地点から掘削を行い、延長5.1mを測る。トレンチの深さは約1.2mである。約50cmの表土の下に黒褐色砂質土が大半を占め、その下は、As-B軽石純層、炭化物及びHr-FP、As-C軽石を含む黒褐色粘土質、5層、基盤層の順である。As-B軽石純層は8~10cmの厚さで堆積している。精査した結果、本トレンチ部分は、かつてAs-B軽石純層直下の黒褐色土層の面でオーブンな状態であったと考えられる。その後、黒褐色土層を切って溝が形成され、As-B軽石の降下を見る。遺構内に降った軽石は除去されその際遺構の肩の部分は粘土で補修(補強)された形跡が認められた。したがって、表土下の黒褐色砂質土はこの遺構を埋めたものであることがわかる。本遺構の走向はほぼ東西方向である。

次に6 aトレンチであるが、フェンスから約18.8m離れた地点から掘り始め、延長は21.5mである。トレンチの深さは掘削開始地点では約90cmを測るが、掘削終了地点では約60cmと緩やかではあるが基盤層が上がって来る。本トレンチの北端はフェンスから40.5m地点となる。本トレンチでは2層を切る大規模な溝が1条、4層を切る小規模な溝が1条、その小規模な溝の中にさらに小さな溝も確認できた。さらに、今回の調査で確認できた古墳周囲の立ち上がりと思われる部分である。溝等の遺構は、いずれも北西から南東方向に走っている。

トレンチ内の土層堆積状況を見ると、本トレンチでは5層である粘土層が殆ど確認できなかった。基本的には基盤層の直上に4層が約28cmと比較的厚く堆積していた。そして掘削開始地点から15.9m付近から基盤層の直上に漸移層が出現する。4層は緩やかに層厚が薄くなって、この漸移層の上に乗り、16.9m付近、フェンスからの直線距離にして35m地点で消滅する。それより外側は、漸移層の直上には3層が平坦な堆積を見せるようになる。のことから、この部分は周囲の外側であると想定される。

【7号トレンチ】

7号トレンチはフェンスから約37.6m離れた地点から掘削を始め延長は7.4mである。トレンチの深さは68~90cmを測る。6 aトレンチと後述する8 aトレンチとの間に設定したサブトレンチ的な意味合いが強い。土層は表土、3層、4層、漸移層、基盤層の順である。ほぼ平坦に堆積する。しかし、トレンチ北端部は大きく現代の擾乱を受けていた。また、同じ北端部で溝を1条検出した。

【8号トレンチ】

8号トレンチも1号、6号と同様に2分割して設定した。古墳墳丘に近いものを8 bトレンチ、もう一方が8 aトレンチである(Fig. 3 トレンチ設定図参照)。

8 bトレンチはフェンスから1.4m離れた地点から掘削を開始し、延長は8.9mを測る。トレンチの深さは110cmである。土層は基本的に1層から5層までが平坦に堆積する。基盤層もほぼ平坦である。また、掘削開始から1.7m~3.7m地点で4層を掘り込んでいる溝が1条検出された。また、溝内で円筒埴輪の小片が3点出土した。

次に8 aトレンチであるが、本トレンチはフェンスから21.3m地点で掘削を開始し延長は20mを測る。深さは112~129cmである。土層の堆積状況は、基本的に1層から5層までが基盤層の上に平坦に確認できる。掘り進んで12.6m付近、フェンスからの直線距離では約34mから基盤層の直上に漸移層が見られ、その上に4層が堆積するようになる。それに対し、古墳周囲内底面に堆積したと考えられる5層が確認できなくなつた。本トレンチの北端までがフェンスから直線距離にして41mを越えることから、6 aトレンチで見られた古墳周囲の立ち上がり部分が確認できるものと期待が高まったが、漸移層がやや波打つような堆積を見せるにとどまり、古墳周囲の立ち上がりと判断するには至らなかつた。

また、本トレンチ内では3層を切る形で大きな溝が検出された。これは7号トレンチ北端部で検出された溝と同一のものである。

V章 まとめ

天川二子山古墳周辺では過去に公共施設建設に伴う発掘調査などが行われているが、墳丘に極めて近い場所で調査の手が入ったのは今回が最初といえる。しかしながら、調査地も含めその周辺は区画整理事業区域内にあり、道路等の整備がかなり進んだ地域でもある。このような制約、またトレンチ調査であったということも加わり今回の調査で古墳周囲範囲の全容解明には至らなかったというのが実情である。

以下では、過去に行われた天川二子山古墳周囲に関する調査結果を踏まえ、今回の調査で得られた成果を考察してみたい。なお、古墳とは直結しない時期の遺構については、別に記す。

1. 古墳周囲について

【過去の調査経過】

現在、天川二子山古墳のすぐ西に群馬県立文書館が所在する。本施設の建設及び書庫増築に伴い、2度発掘調査が行われている。遺跡名は県立文書館遺跡である。両遺跡で古墳周囲に関する貴重な資料が得られている。

○1980年（昭和55年）5月20日～27日（遺構確認調査）

1981年（昭和56年）3月9日～3月27日（本調査）

群馬県立文書館建設に伴い、群馬県教育委員会文化財保護課及び財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が調査主体となり実施された。ここでは遺構確認調査結果の概要を箇条書きにしてみる。

- ・古墳周囲の立ち上がり部が墳丘前方部前端から35m地点で検出された。
- ・立ち上がり部では下端と上端との差が0.18mと浅いことが確認された。これについては、古墳周囲の上方が擾乱によって削平されていることもあるが、周囲自体の掘り込みも外縁付近では僅かで浅いものであったことが伺える。
- ・古墳周囲は、墳丘裾部が深く外方へ向かって次第に浅くなる形状をとり、その底面は平坦であったと思われる。

○1994年（平成6年）8月8日～9月30日

群馬県立文書館書庫増築工事に伴い、群馬県教育委員会に事務局を置く県立文書館遺跡調査会を組織し、実施された。本遺跡では主に中世の濠、井戸、土坑が検出されている。古墳周囲については、調査区の一部で周囲外縁部が確認された。これは昭和55年度調査時に確認された外縁部に続くもので、墳丘前方部前面周囲幅（35m）想定ラインに乗る。掘り込みは遺構確認面から約30cmと比較的浅く、底部はほぼ平坦である。

上記2遺跡の調査結果を踏まえて、今回の調査について考察してみたい。

まず墳丘前方部前面に対し設定した1号から3号トレンチであるが、いずれも先述した墳丘前方部前面周囲幅（35m）想定ラインには達していない。土層の堆積状況を見ても墳丘から最も離れた1aトレンチ北端で基盤層直上に周囲底面に堆積している粘土層が確認できることから、墳丘前方部に面している本調査区は周囲内に収まっていることがわかる。また、1号トレンチ全体を見渡すと、昭和55年度調査で言わわれたとおり墳丘に近い部分で深く標高レベルで96.1m、中間はおよそ96.5mを挟む数値で推移する。史跡地と調査地を区分するフェンスから約23m付近から浅くなり始め、1aトレンチ北端で96.8mを測る。周囲外方へ向かって緩やかに浅くなることが本トレンチにおいても確認できた。昭和55年度調査で得られた古墳前方部周囲計測表による周囲の立ち上がり部の下端レベル96.80m、96.43m、上端レベル96.98m、96.80mという数値からしても、古墳周囲は外方では浅く緩やかに立ち上がっていくことが改めて確認された。

続いて墳丘北側では、4号から8号トレンチを設定し調査を行った。その結果、古墳くびれ部から北東方向に掘削した6号（6aトレンチ）で古墳周囲の立ち上がり部を検出した。検出位置は、6aトレンチの掘削開始地点（古墳墳丘側）から15.9m～16.9mの範囲、史跡地と調査地との境に設置してあるフェンスからの直線距離で

35m地点である。土層状況は、基盤層が外方へ向かって緩やかに浅くなり、古墳周囲内に主に堆積する4層が16.9m地点で立ち上がる。そしてこの4層の下に漸移層が堆積する。立ち上がり部の上端レベル（標高レベル）は97.0m、下端レベル（標高レベル）は96.85mでその差は0.15mであった。しかしながら、6aトレンチ以外のトレーニングでは古墳周囲の立ち上がり部を検出するには至らず、今回の調査で周囲全体の形状が想定できる資料が得られるものと期待したが、立ち上がり部が1カ所だけではその走向、また古墳周囲の形状が盾形であったかどうかなどについても明言することはできない。

今回の限定されたエリア内の調査では、古墳周囲の全体像を把握することはできなかった。将来の調査により、その詳細が解明されることを切に願うものである。ただ、今回の調査で確実に言えることは、調査地はその殆どが古墳周囲内に収まっており、尚かつ、一部盛り土が多くされている部分を除けば、現地表面下1m～1.2mにその広がりを見せるということであろう。本調査地及びその周辺が、前橋市にとって埋蔵文化財保護の観点からも非常に重要な地域であること、その取扱いについては慎重に慎重を期す心構えが必要であることを再認識できたことも一つの成果であったと言える。

2. その他の遺構について

本調査では、古墳周囲の範囲確認が主たる目的であったが、古墳とは直結しない時期の遺構も検出された。濠1条、溝8条、井戸1基である。

遺構名	検出トレーニチ名	幅(m)	走 向	トレーニチ底面 からの深さ	備 考
1号濠	1bトレーニチ 2号トレーニチ 3号トレーニチ	3.15	N-15°-E	1m以上	濠断面の形状はやや鋭角なV字を呈す。4層を掘り込む。
1号溝	1bトレーニチ	1.00	N-20°-E	0.6m	4層を掘り込む。
2号溝	1bトレーニチ	0.34	N-60°-E	0.1m	4層を掘り込む。
3号溝	6bトレーニチ	2.65	N-90°-E	0.5m	As-B軽石降下前に古墳周囲内に堆積した黒褐色土を掘り込む。
4号溝	6aトレーニチ	6.20	N-15°-W	0.2m	3層を掘り込む。
5号溝	6aトレーニチ	0.22	N-50°-W	—	4層を掘り込む。
6号溝	6aトレーニチ	1.15	N-35°-W	0.1m	5号溝を掘り込んでいる。
7号溝	8bトレーニチ	1.90	N-60°-W	0.4m	4層を掘り込む。
8号溝	7号トレーニチ 8aトレーニチ	2.70	N-25°-W	1m以上	3層を掘り込む。
1号井戸	1bトレーニチ	—	—	1m以上	4層を掘り込む。

古墳周囲内に主体的に堆積する4層(As-B軽石と川砂からなる混土層)を掘り込んで形成された遺構が主であった。古墳周囲内に4層が堆積した後、この面で本地域がオープンな状態であったことがわかる。

殆どの遺構がAs-B軽石降下後、相当の時間をおいて形成されたものであるのに対し、今回6bトレーニチで検出した3号溝だけが異なる様相を呈している。周囲底面には5層が堆積するが、壇丘裾部に近い場所、つまり古墳周囲の深い場所であったにもかかわらず、その堆積は12cm程度である。その直上にAs-C、Hr-FP粒を含む量黒褐色粘質土が平均すると約5cmで平坦に堆積し、一時期この面が地表面であったと推定できる。他のトレーニチの壇丘裾部に近い場所も同様な堆積があったと思われるが、擾乱等を受けて確認はできていない。3号溝はこの層を掘り込んで形成され、その後As-B軽石が降下したと考えられる。本遺構は、As-B軽石降下後も補修しその機能を保持していたと思われる痕跡があった。なお、周囲内でAs-B軽石純層が本調査地で確認できたのは

6 b トレンチのみであった。

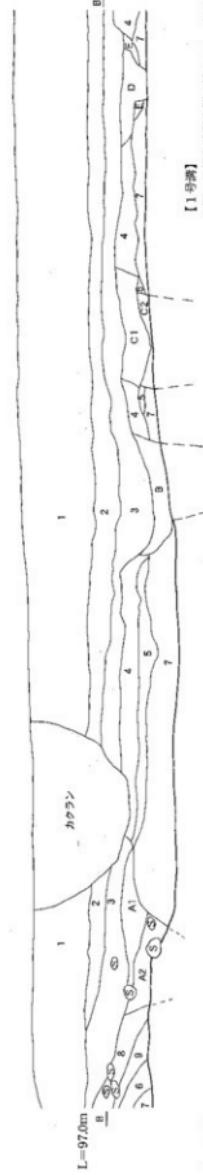
【参考文献】

- 前橋市史 第一巻 1971 前橋市史編纂委員会
県立文書館遺跡 1984 朝鮮馬糞埋蔵文化財調査事業団
県立文書館遺跡 1996 県立文書館遺跡調査会
史跡 八幡山古墳 2002 前橋市教育委員会

1a トレンチ南東端部土層断面図
西 壁



1b トレンチ土層断面図
西 壁

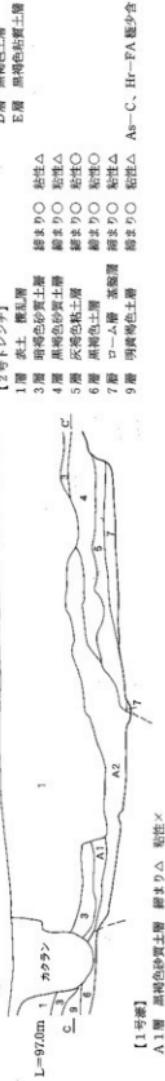


【1号坑】
 A.1層 黑褐色砂質土層 粘まり△ 粘性×
 A.2層 黑褐色砂質土層 粘まり△ 粘性×

【2号トレンチ】
 1層 楊土 粘性層
 2層 黄褐色砂質土層
 粘まり○ 粘性△
 3層 黄褐色砂質土層
 粘まり○ 粘性△
 4層 黑褐色砂質土層
 粘まり○ 粘性△
 5層 黑褐色砂質土層
 粘まり○ 粘性△
 6層 黑褐色土層
 粘まり○ 粘性○
 7層 ローム層 基盤層
 粘まり○ 粘性△
 8層 明礬地土層
 粘まり○ 粘性△ As-C, H-FA 頸少合

【1号井戸】
 B層 黑褐色砂質土層 粘まり△ 粘性×
 C1層 黑褐色砂質土層 粘まり△ 和性×
 C2層 黑褐色砂質土層 粘まり△ 和性×

【2号井戸】
 D層 黑褐色土層 粘まり○ 粘性△
 E層 黑褐色砂質土層 粘まり○ 粘性○



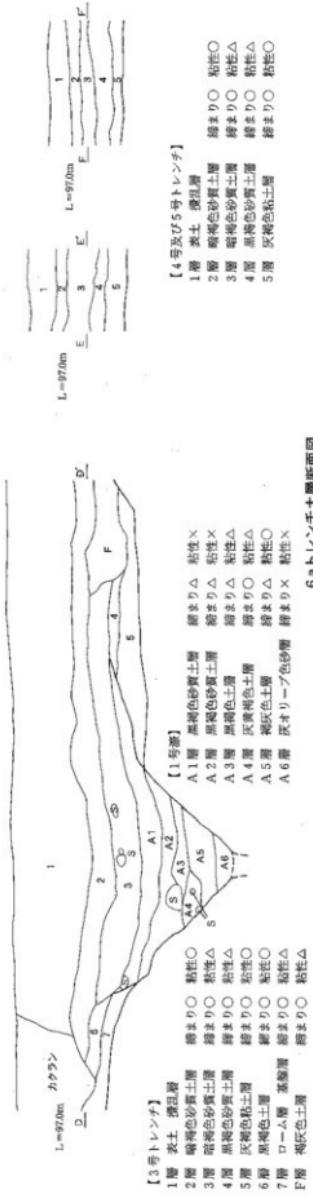
0 1:60 2m

Fig. 4 1号 (1a, 1b)・2号トレンチ土層断面図

3号トレーンチ土層断面図
西壁

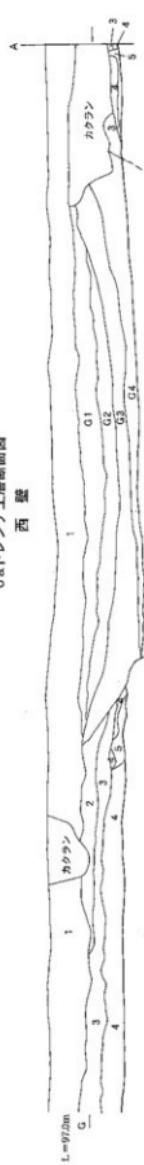
4号トレーンチ土層断面図
西壁

5号トレーンチ土層断面図
西壁

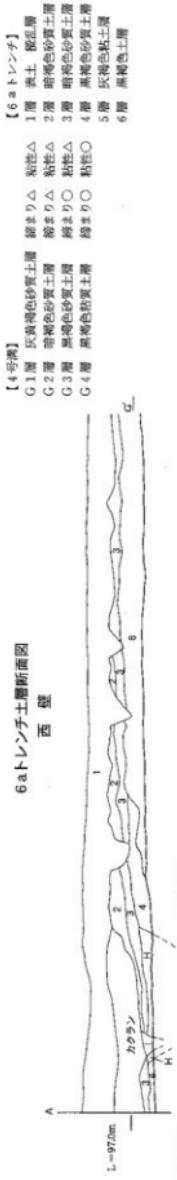


- 14 -

6aトレーンチ土層断面図
西壁



6aトレーンチ土層断面図
西壁



【5号窓】

1層 喀斯特砂質土層 絆まり○ 粘性×
H層 黑褐色砂質土層 絆まり○ 粘性△

カクラン

A

C

G1 G2 G3 G4 G5 G6 G7 G8

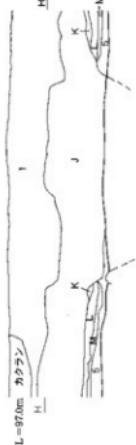
L=97.0m

Fig. 5 3号～6号(6a)トレーンチ土層断面図

0 : 1:60 2m



7号トレンチ土層断面図



トレンチ南端部土層断面図
西壁

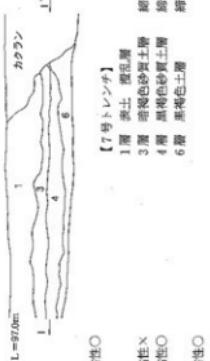
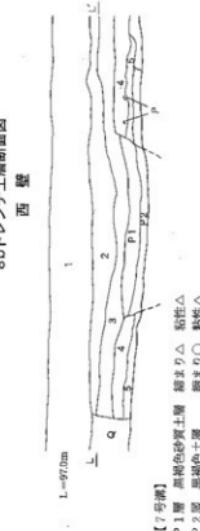
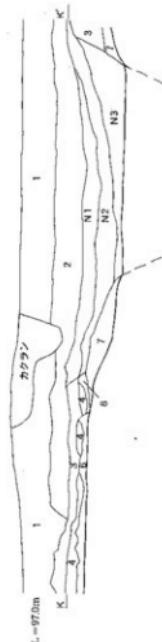


【8月トレンチ】

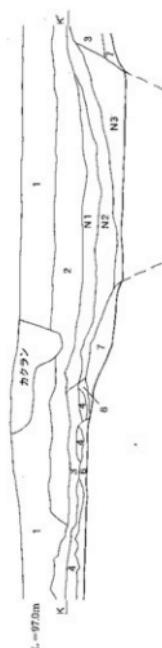
- 15 -



8aトレンチ土層断面図



8a レンチ土層断面図
西壁



【8号等】		【9号等】	
N1層	黄褐色砂質土	褐まり△	粘性△
N2層	淡褐色砂質土層	褐まり△	粘性△
N3層	黑褐色土層	厚まり○	粘性○
			4層 黑褐色沙質土
			5層 黑褐色土層
			6層 黑褐色土層
			7層 灰褐色土層



Fig. 6 6号(6b)・7号・8号(8a・8b)トレンチナット断面図



1a トレンチ全景 (南東より)



1a トレンチ西壁 (東より)



1b トレンチ全景 (北西より)



1b トレンチ北西端部西壁 (東より)



1b トレンチ南東端部 1号漆検出状況



2号トレンチ全景 (北西より)



2号トレンチ北西端部西壁 (東より)



2号トレンチ南東部 1号漆検出状況



3号トレンチ全景（北西より）



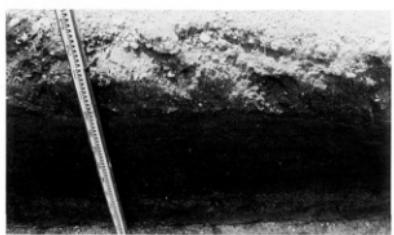
3号トレンチ北内南壁（東より）



3号トレンチ内 1号窓検出状況



4号トレンチ全景（南西部）



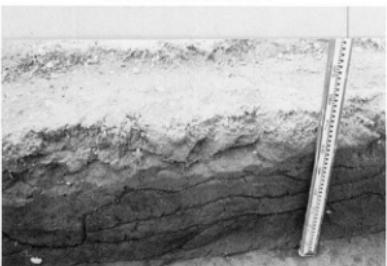
4号トレンチ 西壁



5号トレンチ全景（南西より）



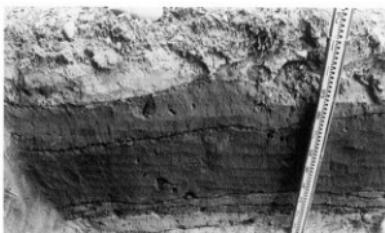
6aトレンチ全景（南西より）



6aトレンチ内 古墳周縁立ち上がり部



6bトレンチ全景（北東より）



7号トレンチ全景（南東より）



8aトレンチ全景（南西より）



8bトレンチ全景（北東より）



抄 錄

フリガナ	アマガワフタゴヤマコフン
書名	天川二子山古墳
副書名	周堀範囲確認調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小峰 篤 大崎 和久
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町二丁目10-2
発行年月日	西暦2004年3月18日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
アマガワフタゴヤマコフン 天川二子山古墳	アシハラヒビンキヨウタケツ 前橋市文京町	10201	15H35	36°22'36"	139°05'20"	20030623 20030708	90.25m ²	範囲確認

* 北緯、東経の数値は、世界測地系による。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
天川二子山古墳	古墳周堀	古墳時代	古墳周堀	土師器片、埴輪片
特記事項				

天川二子山古墳

平成16年3月11日 印刷

平成16年3月18日 発行

編集発行 前橋市教育委員会
前橋市三保町二丁目10-2
Tel 027-231-9531

印刷 刷 朝日印刷工業株式会社